

国立 松江工業高等専門学校

プログラムの名称：OJTによる学生の自主性を育む支援
 -- 教職員のカウンセリングマインドと
 学生のリーダーシップ能力の向上

プログラム担当者：数理科学科 教授 勝部 豊

キーワード

1. 自主性 2. OJT 3. カウンセリングマインド 4. リーダーシップ

1. 高等専門学校の概要

1964（昭和39）年に創設された松江工業高等専門学校における教育は、本科卒業生及び専攻科修了生の将来的目標として「創造性と実践的技術力を兼ね備えた国際的エンジニア」を目指すものである。

この教育理念に基づき、本校では『『学んで創れるエンジニア』の育成』を教育目標として掲げている（図1参照）。すなわち、健全な心身を保ち自己を常に向上させようとする学びの「姿勢」、新たな形をいかなる困難にも負けず創り上げようとする「意欲」、そして技術の進化や地域・国際社会、福祉、地球環境保全に貢献する「意志」、以上の3点を兼ね備えた「エンジニア」の育成を目標として教育を行っている。

価値観が多様化し自己責任による選択が求められる現代にあって、資質、能力、知識に差のある多様な学生が増加する中、本校では現在の自己を将来に向かって向上させようとする「自主性」を育てることを、教育における最初にして最重要な方針としている。

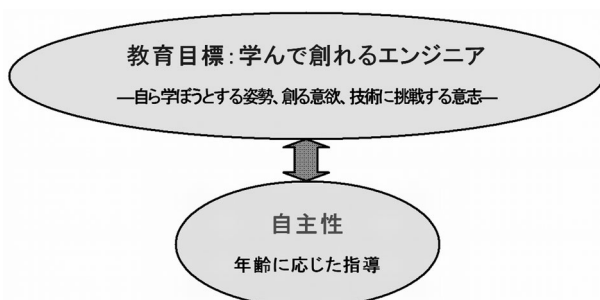


図1 申請校の教育理念と教育目標

2. 本プログラムの概要

「価値観の多様化」がいわれ、多様な選択肢からの自己責任による選択が求められている。だが将来の自分のための選択には、具体的な将来像の獲得と自己変革の積極的な姿勢が必要となる。

松江工業高等専門学校では、自己を向上させようとする「自主性」を育むことを教育方針としてきた。まず1～3年を「自主性を育てる段階」とし、多様な学生に対応する手厚い指導を行っている。そして4・5年を「自主性を伸ばす段階」とし、自己選択の姿勢を求めている。またキャリア教育により、将来像の明確化を促している。

さらに、学生の質的な変化により的確に対応するため、OJT（On the Job Training）による2つの新しい取組を行う。

第1に、多くが科学技術を専門とする本校教職員のカウンセリングマインドを専門家の助けを借りて向上させる。第2に、学生のリーダーシップ能力を向上させるため、地域の小中学生を対象にスポーツ講習・理科大学実験講習を行う。こうした学内外の取組により、学生の自主性を育む体制を確立する。

3. 本プログラムの趣旨・目的

本校では、学生の自主性を育むため、写真1・2に示したような朝の教員連絡会や学年会など、教職員同士の連携を深める体制を通して、学生への支援を行ってきた。



写真1 朝の教員連絡会（毎朝8：30～8：35）



写真2 学年会(週1回)

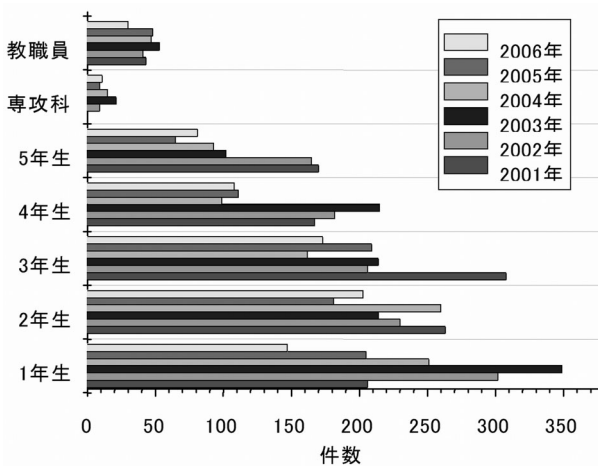


図2 保健室利用件数

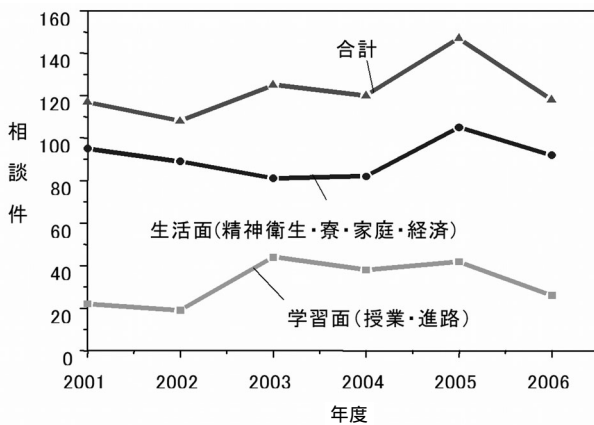


図3 学生相談室利用件数年推移

しかし学生の抱える問題は、生活面、学習面など多岐にわたることがわかってきた。学生相談室に寄せられる相談件数も増加傾向にある(図2・3参照)。

特に、精神衛生、寮、家庭、経済的問題などに関係する相談内容が多く、多様な学生への対応が必要になっている。本校の退学率の調査からは、3年までに留年した学生の退学率(図4参照)が非常に高くなっていることが分かる。さらに3年修了とならず、高校卒

留年生の卒業率
(H7年度入学生からH13年度入学生累計)

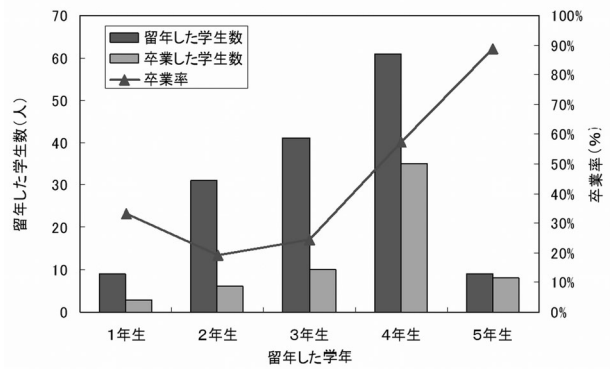


図4 留年生の卒業率

松江高専卒業生(H5.10.15)の回答(大卒との比較)

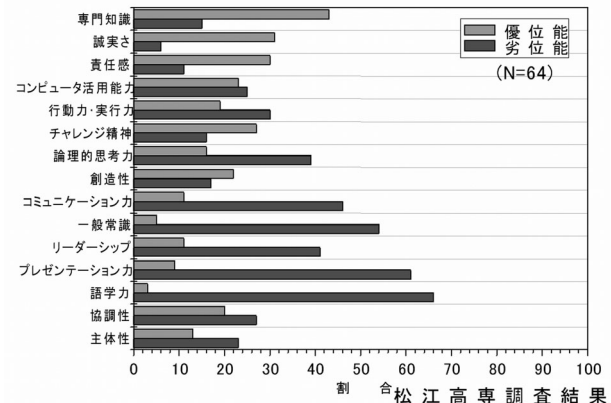


図5(a) 卒業生の資質と能力についてのアンケート結果(本校卒業生の回答)

全国高専卒業生採用企業の回答(大卒との比較)

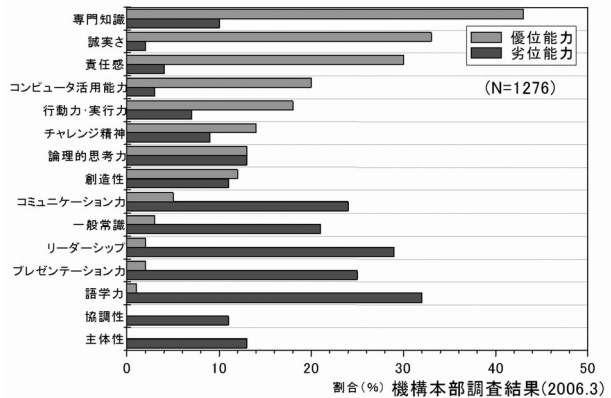


図5(b) 卒業生の資質と能力についてのアンケート結果(全国高専卒業生を採用する企業の回答)

業の資格もなく退学する者も1~3年に1%(6人程度)いることが分かっている。この退学者は、中学卒業で就職するか、通信制の高校に入学することになり、将来的に不安を持つことになる。場合によっては、ニートやフリーターとなる場合もあり得る。

また、図5(b)に示した採用企業から見た高等専門学校卒業生の評価には、「与えられた仕事はきちんとこなす」「専門技術を習得しているので即戦力として使え

る」というプラス評価がある一方で、「人の上に立った場合、総合的な観点に立った判断が下せない」「対人交渉力が乏しい」というマイナス評価もある。

また、調査は十分ではないが、就職直後に離職する卒業生も存在する。

これらの事実関係を考慮すると、本校がこれまでやってきた学生支援の取組をさらに強化する方策が必要であると結論付けられる。

そこで本プログラムは、OJTの手法により、自己を向上させようとする学生の自主性を育むことを目的とする。この目的の達成のため、現在すでに確立されている教職員同士の連携を深めた体制を、さらに強化する2つの取組を新たに行う。それは、「学内でのOJTによる教職員のカウンセリングマインド向上」(以下、教職員OJT)と「学外でのOJTによる学生のリーダーシップ能力向上」(以下、学生OJT)である。

本校では「2. 本プログラムの概要」で述べたように、1～3年を自主性を育てる段階と位置付け、入学してくる多様な学生に対し、3年まで手厚い学習・生活指導を行っている。また、4・5年を自主性を伸ばす段階と位置付け、受け身の姿勢から自ら行動する姿勢を育てている。図6に、本校のこれまでの取組と新しい取組の関連を示す。

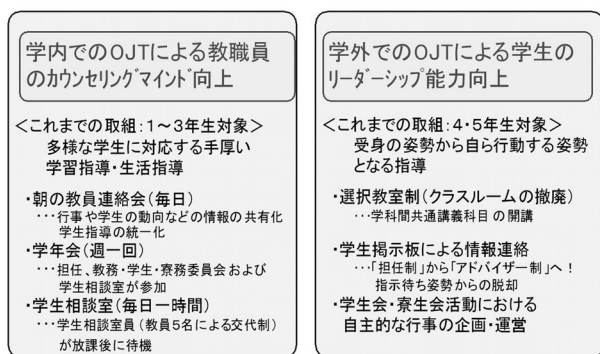


図6 新たな取組と関連したこれまでの取組

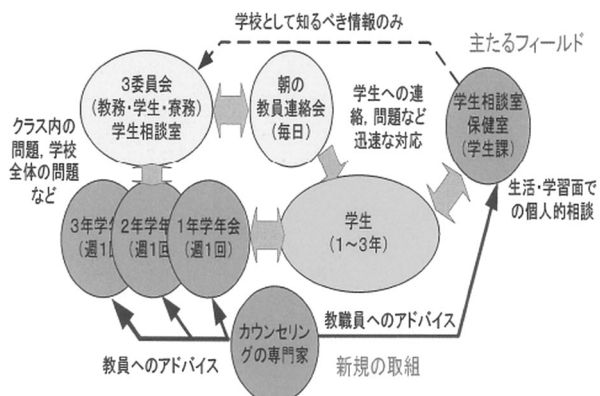


図7 学内でのOJTによる教職員のカウンセリングマインド向上

[教職員OJT]

第一の取組である、教職員OJTを図7に示す。1～3年では、朝の教員連絡会(毎日)・学年会(週1回)・学生相談室(毎日1時間)などの学内における連携をさらに強化するため、専門家の助けを借りて、教職員のカウンセリングマインドをOJTにより向上させる。

本校の教員は、多くが科学技術を専門としており、1～3年の担任指導については、他の教員との連携により、学生の問題に対応する機会がほとんどで、学生の問題に対して適切に対応していない場合もあり得る。そこで専門的知識・経験に基づく助言を直接的・即時的に与えられる人材を常勤職員として配置する取組を新たに行う。

具体的には学生相談室、寮の相談窓口(生活面全般)・学年会の場に、臨床心理士や教育現場での経験を長く積んだカウンセリングの専門家を配置する(本校での教育経験が長く、学内組織や学生の動向を熟知した退職教員の再雇用により人材を確保することも考えられる)。

このような専門家が状況に応じた対応・助言を行う過程を本校の教職員が観察し、学生に対するアプローチの方法、重要視すべき問題の優先順位などのノウハウを獲得する。そうして得られたノウハウを、個人情報保護に配慮した上で全教職員に向けて発信することにより、教職員のカウンセリングマインドの向上を図る。

[学生OJT]

学生OJTの取組を図8に示す。4・5年では自主性を伸ばすことを目的に、選択教室制、学生掲示板による情報連絡、学生会・寮生会活動における自主的な行事企画・運営などの学内での取組を行っている。

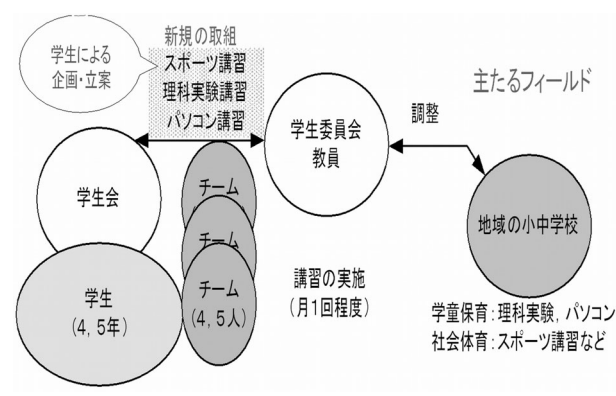


図8 学外でのOJTによる学生のリーダーシップ能力向上

新しい取組では、学生会や寮生会の取組を発展させ、学外においてリーダー体験を行う。具体的には、学生自らの企画により、地域の小中学生を対象に、3年生までに学習した専門知識や課外活動で得たスポーツなどの知識や技術を生かして、講習会を行う。学外に場を移し、学生がすでに身に付けている知識・経験を、相手の状況に十分配慮しながら伝達する過程を通して、課題の達成に向けて自主的な工夫を凝らす取組を新たに行う。

具体的な内容としては、すでに習得した理科や情報処理（コンピューター）に関する知識を生かし、高齢者や小学生など初心者に対する講習を行うこと、また、ロボコン・課外活動などで身に付けた知識・経験を生かし、小・中学生の授業やクラブ活動、あるいは学童保育の場において指導的役割を果たすことなどが考えられる。

手順としては、学生会を軸として、学生OJTを行う学生4～5人のチームを編成する。このチームの活動の場としては、例えば、小学校の学童保育の場がある。現在、共働きの家庭も多く、学童保育の補助は必要とされている。また、小中学校では、これまで行われてきた学校の課外活動が社会体育となって、指導者は一般のボランティアで行われる場合がある。この場では、部活動の経験を生かした活動が可能となる。

教職員OJTでは、専門的知識・経験を有する人材から直接学び、カウンセリングマインドの向上を図り、SD（スタッフディベロップメント）を推進することができるので、学生支援をより効果的に行うことができる。学生OJTについては、複眼的な思考力、多様な背景を有する他者の立場を斟酌する力、課題の達成に向けたマネジメント能力など、高等専門学校生の弱点を補う機会となる。また、地域のニーズに対応した講習を行うことで、地域貢献につながる。

4 . 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

[教職員OJT]

図7に示したように本校がこれまで構築してきた学年会や朝の教員連絡会など、教員同士の連携を深めた体制が確立されている場に常勤職員として専門家を配置することで、直接的・即時的な助言を身近な問題として教職員が意識し、カウンセリングマインドの向上を図り、学生支援を質的に向上させられることが特徴的である。この取組は、問題意識を共有し、意見交換を行うなど、教員同士が連携する学年会などの体制が

確立されていることが前提となることから、そうした体制作りそのものが他大学等の参考となる。

[学生OJT]

これまで学生会や寮生会が行ってきた学校行事の運営を、学外に発展させる方法であり、普段学ぶ立場にいる学生が、逆に教える立場に立つことで、身に付けた知識・経験を別の角度から捉え直すことが可能になる。その上で、相手の状況を考慮しつつ伝達・表現方法を変えるなど、学生同士が自主的な工夫を凝らす点が特徴的である。この取組のように、学生が既得の知識・経験を生かして学外における活動に結び付けることは、他大学等の参考になると考えられる。

5 . 本プログラムの有効性（効果）

[教職員OJT]

これまで実施されてきた講演会・研修会では、取り上げられた事例を身近な問題と結び付けて考えられない場合もあった。この取組では、本校においてまさに今現在生じている問題に対する助言が得られるので、学生支援に携わるすべての教職員が、より切実な問題としてカウンセリングマインドの重要性を認識することが可能となる。

また、そうした支援に関する直接的・即時的なノウハウを獲得し、発信することで、教職員のSDの面において継続的な取組となる効果が期待される。専門的知識・経験を有する人材からの助言を受けることにより、すでに確立されている教員同士の連携を深めた体制をさらに強化することができる。支援を受ける学生の面からも、また教職員のSDの面からも、非常に有益な効果が期待できる。

教員同士の連携による1～3年への手厚い学習・生活指導をさらに強化する今回の取組は、資質・能力・知識の異なる多様な学生や、中でも発達障害を持つ学生のニーズにも対応できる。また手厚い学習・生活指導により退学者を減らすことは、ニート・フリーター対策といった社会的ニーズにも対応している。

学生相談室のような特定の場に限らず、授業、担任業務、課外活動指導など、学生に関わるすべての場が教育活動であり、そこではカウンセリングマインドが必要とされる。また研究活動においても、卒業研究や特別研究を指導する学生との信頼関係を築く過程では必要とされるものであり、どちらにも密接な関連性が見出せる。

[学生OJT]

学内にとどまらず学外で講習を行うことで、視野がさらに広まり、学生の人間的な成長の促進が期待できる。具体的には、観察力・コミュニケーション能力・マネジメント能力など、リーダーとしての資質の向上をもたらす効果が期待される。学内における学生会・寮生会活動での行事企画・運営は、自主性・リーダーシップを発揮する絶好の機会と位置付けられる。

高専祭などの場では、計画の詳細を把握していない下級生に的確な指示を与えつつ、準備を進めねばならない。そうした際に、学外における活動で培ったマネジメント能力などのリーダーとしての資質を生かすことができ、相乗効果が期待できる。

今回の新たな取組を通して、指示待ちではなく、主体的・自主的に物事に取り組む姿勢を身に付けた人材を育成することができる。さらにNPO（民間非営利組織）などの社会的活動への参加も視野に入れた人材育成は、これからの社会的ニーズに対応している。観察力・コミュニケーション能力・マネジメント能力などのリーダーとしての資質は、本校における創造性教育の場でも不可欠なものである。これら自主性を持った取組は、教育・研究活動を進めるにあたって大きく寄与するものである。

6. 本プログラムの改善・評価

[教職員OJT]

今回の新たな取組の開始前の段階で、まずは支援を受ける立場である全学生を対象として、学生支援全般に関するアンケートを行う。ここでは特に教職員の学生支援に対する取組姿勢の面に関して現状の分析を行う。また教職員を対象に、学生支援に対する取組に臨む際の姿勢や質問事項についてアンケート調査を行う。そして新たな取組を実施した後、学生・教職員双方に同様のアンケートを行い、両者の結果を比較することでこの取組によりもたらされた効果を検証する。

さらに、配置した専門家及び外部の講師と、県内の高校教員を交えて助言に際して留意した事項についての報告会を行い、SDの実現の程度を検証・評価する。

[学生OJT]

学外における活動に参加した学生による相互評価を行う。また、派遣先を対象としたアンケート調査を行い、学生の取組姿勢や工夫の度合いについて評価する。参加学生の間での役割分担や、議論の場での発言姿勢

について、活動を通して得られた気付き（相互評価）、講習内容の分かりやすさ・理解度や、学生の取組姿勢についての評価（派遣先対象）を収集し、学生へフィードバックする。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

(1) 実施計画

学生支援GP推進室を校内に設け、以下の計画を実施する。

2007（平成19）年度

[教職員OJT]

教職員、学生それぞれを対象として事前アンケート（TEGを含む）を実施して、学生支援に関する取組に臨む際の姿勢や意識を把握し、本校における学生支援の取組の基礎となるデータとして反映させる。

カウンセリングの専門家の人材の選定・派遣交渉を行い、配置する（2名）

教職員連携の場（学年会、教員連絡会など）へ専門家が参加し、それぞれの場で得られた専門的助言、及びその対応について記録する。

[教職員OJT][学生OJT] 合同の中間報告会を開催し、外部有識者から意見を聞くことにより、次年度に向けた課題を確認する。

[学生OJT]

講習会を行う学生チームを編成し、講習内容（コンピューター、理科実験、スポーツなど）の検討を行う。

地域の小中学校を対象に、授業やクラブ活動、及び学童保育や社会体育の場における講習会のニーズを調査する。そして、編成した学生チームと講習の内容や日程の調整を図る。

講習内容及び日程の調整がついた後、チームの学生代表と派遣先責任者との事前打ち合わせを行う。学生による企画・進行案などについて派遣先責任者からの意見・要望も考慮しながら協議し、最終的な講習会の計画をまとめる。

計画に基づき、チーム内の役割分担を行いながら、実際に講習会を実施する。講習相手の反応を確かめつつ、適宜修正を加える。

講習会実施後、参加学生を対象とした相互評価アンケート（チーム内の役割分担や、議論の場での発言姿勢についてなど）、派遣先を対象としたアンケート（講習内容の分かりやすさ・理解度や、学生の取組姿勢についてなど）を実施する。

事例67 松江工業高等専門学校

[教職員OJT][学生OJT] 合同の中間報告会を開催し、外部有識者から意見を聞くことにより、次年度に向けた課題を確認する。

2008（平成20）年度

[教職員OJT]

専門的助言がもたらされた場合ごとにそれらを記録する取組を継続し、取組後の学生・教職員双方対象のアンケート調査結果との比較検討を行う。[教職員OJT] [学生OJT] 合同の事後報告会を開催する。

[学生OJT]

講習内容の改善・追加を検討した上で、引き続き講習会を実施する。参加学生についても、上級生から下級生への引継を行う。[教職員OJT][学生OJT] 合同

の事後報告会を開催する。

（2）将来性

[教職員OJT]

本校で定めた「SDの日」（全教職員対象）などの場で情報の共有化を図る。また、新人教員に対する研修などのSDの場で、ケーススタディの材料として活用する。

[学生OJT]

周辺地域におけるニーズを把握しているため、学生会・寮生会といった学内の組織を利用して、ボランティア活動の一環として活動を続け、学校の広報活動との連携を図る。

選 定 理 由

松江工業高等専門学校においては、学生支援に関する目標等に基づき、学内の組織及び学外の諸機関との連携等によって学生支援の取組を着実に実施されており、その結果はISO14001の取得において実証されるように環境問題の真摯な取組と継続的な努力に裏づけられています。

また、今回申請のあった「OJTによる学生の自主性を育む支援」の取組は、「価値観が多様で変化の激しい現在社会の中で自己の明確な将来像」を見出すことの難しい学生に対して「自主性を育み伸ばす」ために、学生のリーダーシップ能力と教職員のカウンセリングマインドの向上を意図して、OJT手法による支援プログラムであり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。

特に、OJTによるカウンセリングマインドの向上は学生支援の成否を決める鍵であり、学生と教職員との協働的な能力向上プログラムで、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。